

Special Interview

人が集う川崎市国際交流協会にしよう!

寺尾 宇一会長に聞く

略 歴

寺尾サッシ工業(株)代表取締役、川崎商工会議所常議員
川崎市国際交流協会の立ち上げから関わり、評議員、理事(副会長)を歴任し、平成22年1月会長に就任。
国際交流センター活用企画検討委員会の委員長として、センターの有効活用について意見の取りまとめやより効果的な対策の検討に尽力。現在も活動中。
外国人市民のための日本語スピーチコンテストの審査員も、長年つとめている。



Q1 会長自身についてと川崎市国際交流協会とのご縁をお聞かせ下さい。

私は川崎市川崎区の出身で、地元の小・中学校に通い、現在もそこで暮らしています。

私が育った頃は大企業の工場が次々と誘致され、工業地帯として発展していきました。小学校の頃は、羽田空港の騒音で先生の話が聞こえない時もありました。

最近では工場跡地が住宅として開発されていますが、10年後、20年後の変貌を見据えた『まちづくり』をしていく必要性を感じます。国際交流とは関係ないかもしれないが…「川崎の歴史」も皆さんに伝えたいですね。(笑)

私は、川崎市国際交流協会の立ち上げ時から関わってきました。近年、外国人市民が増え続けていますので、異文化を持つ子ども達への対応や教育に対する検討の必要性を感じています。ただでさえ、保育園等は不足していますから…。

また、小学校では先生と保護者の協力や連携が大切ですから、異文化を持つ子ども達と日本の子ども達が相互に理解と配慮ができると良いですね。

Q2 異文化を持つ方達との共生をより良いものとするには、どのような取り組みが必要でしょうか？また、国際交流協会が担うべき役割についてもお聞かせ下さい。

私は外国人も日本人もお互いに勇気をだして「いいところを認めあう」「声をかけ、親切にする」ということを提案したいですね。そして、小さなコミュニティから理解しあうようにしていけたらいいと思います。

例えば、地震でも医療でも、いざ困ったという時に「外国の方が本当に必要とするものは何か？」

というニーズを把握することが大切です。しかも、それは日本人の発想によるのではなく、当事者である外国人の皆さんが何を必要としているか聞くべきですよ。そのための拠点として、川崎市国際交流協会が活用されるべきだと考えます。

私も経験がありますが、外国で困っている時に親切にしてもらったら、本当にうれしいし、忘れない。その国全部が良い国みたいに思えますね。そして、自分もお返しに何かしたいと思えますよ。

それが、国際交流の原点ではないでしょうか。

Q3 川崎市国際交流協会会長としての抱負は？

会長として1年経ちますが、これからは、民間企業とのコラボレーション、行政とのコラボレーションというように、両者の橋渡的存在を目指したいですね。

例えば、姉妹・友好都市への訪問団にしても都市の特徴によっては、行政と民間と一緒に訪問して、多彩な交流が生まれるようにしたいですね。

また、施設の相互利用や活用法のノウハウについても情報交換できればと考えています。来年度はその一歩を踏み出したいですね。

お忙しい中、いろいろとお話いただきありがとうございました。川崎のなつかしいお話にも時間を忘れて聞き入ってしまいました。

また、子ども達への温かいまなざしには感銘しました。川崎をよく知っていらっしゃる会長のますますのリーダーシップに期待しております。

(取材・編集ボランティア 青柳尚子)